

『朱漆巴紋鳳凰七宝繫沈金丸櫃』 修理報告

佐久本純¹ 土井菜々子²

I. はじめに

本資料は、一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵の『朱漆巴紋鳳凰七宝繫沈金丸櫃』である。

令和4年5月9日より令和5年3月28日まで沖縄県立博物館・美術館修理修復室内の琉球漆工藝舎にて修復が行われた。修復にあたっては、佐久本純を担当職員とし、土井菜々子を修復責任者兼担当者とした。

II. 修理報告

1. 名称

朱漆巴紋鳳凰七宝繫沈金丸櫃 (No. 367)



2. 員数・法量(mm)

一合 高さ 173 径 231

3. 資料概要

円筒形、甲盛りを持たせた印籠蓋造りの丸櫃。懸子を付す。蓋側面には上部に二本、下部に一本、身の側面には上部に一本、下部に二本の玉縁を巡らす。表面には朱漆を塗り、沈金を施す。蓋内側、懸子の縁、懸子裏と底面は黒漆塗。身の口縁部は白檀塗り。蓋中央には左三巴紋、紋を挟んで一對の鳳凰を表す。身側面は、三方に左三巴紋を、巴紋の間の三方向に、それぞれ一對の鳳凰が配される。蓋身共に七宝繫の地文様。

¹ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター 琉球文化財研究室 琉球文化財研究係 主事

² 琉球漆工藝舎 代表

4. 損傷状態

比較的状态は良いが、塗膜や沈金の溝に経年の汚れが付く。蓋表面は劣化が進み、僅かに艶を失っている。火災被害による薄葉紙の付着があり、シミが残る(図 1-1)。茶色い液体のようなものが染み出た汚れが玉縁の間など、複数箇所に見られる(図 1-2)。

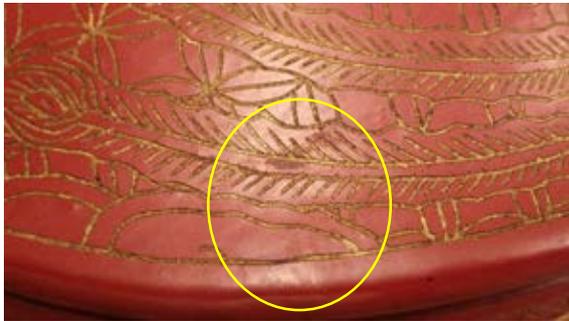


図 1-1 薄葉紙の付着跡

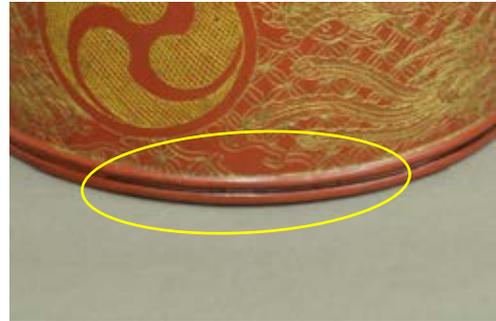


図 1-2 茶色い汚れ

蓋裏に1箇所、5cmほどの亀裂が入る(図 2)。懸子の側面の塗膜が欠失し、下地が露出している(図 3)。



図 2 蓋裏の亀裂



図 3 懸子の塗膜剥落

身の玉縁下部は、塗膜の剥離剥落が著しく、大変危険な状態である。火災直後の状態確認の際に採取された剥落塗膜が別途保管されている(図 4)。剥落の危険性が高い箇所については、雁皮紙による仮止めが施されている(図 5)。



図 4 剥落片



図 5 仮止め箇所

身の玉縁下部は、その他の箇所にも塗膜の剥落がある(図6)。また、底裏面は使用痕が見られる(図7)。



図6 玉縁の塗膜剥落



図7 底裏面

5. 修理原則

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う事とする。修理に際しては、十分に事前調査を行い、傷み等の現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後報告書を作成し提出する。

6. 修理方針

薄葉紙の付着跡や茶色い液体が滲出したと思われる汚れは、クリーニングにより可能な範囲で除去を行う。劣化した塗膜は漆固めにより、艶を取り戻す。別途保管された塗膜片は、可能な範囲で元の位置に戻す。

7. 修理工程

- ①修理前写真撮影、調査
- ② クリーニング
- ③塗膜押さえ
- ④漆固め
- ⑤刻苧充填
- ⑥下地付け
- ⑦修理後写真撮影
- ③報告書作成

8. 修理作業

はじめに修理後との比較ができるよう、修理前撮影および現状調査を行った。クリーニングは、資料全体の埃を払った後、精製水で湿らせた綿布を用いて拭き上げた。茶色い液体のようなものが染み出たような跡や油を含んだ汚れ、カビなどには、適宜、エタノール水溶液(60～70W/V%)や重曹水(3～5W/V%)を用いた。なお、重曹水を使用した際は汚れと混合してできた塩を残留させないように精製水で十分に拭き取った(図8-1～8-4)。



図 8-1 綿布によるクリーニング



図 8-2 懸子のクリーニング



図 8-3 玉縁のクリーニング



図 8-4 凹部分の茶色汚れ

別途保管されていた塗膜片は、剥落箇所と照合させ、もとの位置に戻し、仮止めを行なった(図 9-1, 9-2)。



図 9-1 仮止め



図 9-2 仮止め

接着を行う前に、下地が露出している部分に前処置として生漆を染み込ませ、補強した。漆が乾く間に、各修理部分の形状に合わせて木型を作成し、塩化ビニルシートなどをあてた治具を作成した。塗膜接着作業は、剥離している塗膜の下に溶剤³で希釈した麦漆を含浸させ、溶剤を揮発させた後、木枠と竹ヒゴを用いて安定させた(図 10-1, 10-2)。

³ ターペンタイン/ホルベイン社



図 10-1 塗膜圧着



図 10-2 塗膜圧着

木地亀裂箇所には、溶剤で希釈した麦漆を染み込ませて補強した。

塗膜の強化をはかるため、漆塗面に摺漆を施した。朱塗り部分は色味の変化を避けるため、調合した透漆(木地呂、梨子地、生上味)を溶剤で希釈したものを塗布し、漆が表面に残らないよう、しっかり拭き取った(図 11)。



図 11 塗膜の強化

塗膜を接着した箇所や木地が露出している箇所に刻苧を補填し、最表面に漆下地を付けた。下地面は水研ぎや摺漆による調整を施して仕上げた(図 12)。

蓋表に摺漆を施し、艶を取り戻した。作業は、溶剤で希釈した透漆を沈金の溝に漆が入らないように不織布で塗布し、丁寧に拭上げた(図 13)。最後に、修理前と比較出来るよう、修理後の撮影を行った。

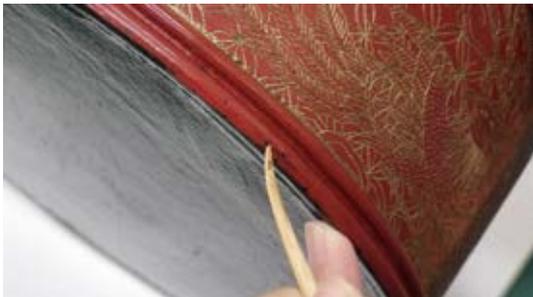


図 12 下地付け



図 13 艶調整

9. 修理場所

沖縄県立博物館・美術館内修理修復室

10. 修理期間

令和4年5月9日～令和5年3月28日

11. 所見

- ・蓋の口縁部をマイクロスコープで観察したところ、箔片の粒子が確認されたため、金箔を蒔いた上に透漆による塗が施されていると考えられる。
- ・蓋には、過去に修理を行った跡が確認できる。

修理前修理後写真



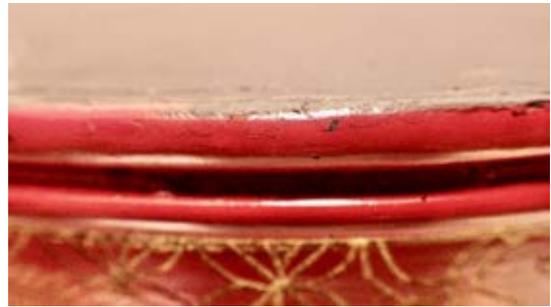
全景 修理前



全景 修理後



玉縁下部 修理前



玉縁下部 修理後



玉縁下部 修理前



玉縁下部 修理後



懸子 塗膜欠損箇所 修理前



懸子 塗膜欠損箇所 修理後